

子どもたちの明日

Children, Our Future

「村の幼稚園」事業まとめ 特別号



認定NPO法人

幼い難民を考える会

CARING FOR YOUNG REFUGEES

CYR「村の幼稚園」事業まとめ 特別号

目次

CYK/CYR「村の幼稚園」事業モデルとは プノンペン事務所長 チャン・スレイ	3
幼稚園概要 開設年、登録児童数、卒園児数等(表1)	7
記録からたどる「村の幼稚園」 保育者手当の金額・費用負担の推移(表2) 10日間能力強化研修会実施記録(表3) 見学研修会実施記録(表4)	8 10 11
エピソード「村の幼稚園」 ①幼稚園管理委員会の強い想い ②親の協力でおやつを提供 ③保育者への信頼 ④幼稚園運営の安定と更なる発展	12 13 14 15
「村の幼稚園」開設地域地図	16
ギャラリー「村の幼稚園」	17
幼い難民を考える会 -アジア紛争の歴史とCYRの歩み	22
謝辞 幼い難民を考える会 代表理事 関口 晴美	26
年表―「村の幼稚園」事業を中心に(2008年～2024年)	27
CYR情報 CYK/CYRの教材について	

CYK/CYR「村の幼稚園」事業モデルとは

プノンペン事務所長 チャン・スレイ

幼児期は人間の基礎がつくられる大切な時期です。幼児期に適切な教育を受けることで、子どもたちの学習意欲が高まり、国の柱となる子どもの将来に大きな影響を及ぼします。カンボジアの政府も幼児教育の大切さを認め、教育省・内務省・女性省と関係各省が協力し合って、2011年までに451ヶ所の地域幼稚園が開設され、世界銀行などの支援があり、2014年以降3年間でさらに1,000ヶ所が増えました。こうした政府の方針に沿って、「幼い難民を考える会」は2011年から活動の範囲を拡げ、より多くの子ども、特に貧しい地域の子どもたちが、教育を受けられる「村の幼稚園」開設に力を入れてきました。

1. 目的

「村の幼稚園」の子どもたちの健やかな成長を助けるために、下記の活動を行う。

- ・幼稚園に通う年齢になった子ども、特に5歳児を対象に質の高い幼児教育活動の分野を広げる。
- ・子どもが 集団生活に慣れ、その社会性を育てる(子どもたちが遊んだり、勉強したりする中で、基本的な礼儀作法や言葉使いを学ぶ)。
- ・保健衛生のための生活習慣を身につける。
- ・栄養状態の改善・健やかな成長を支援する(補助給食を提供)。
- ・小学校教育への移行をスムーズにする(文字や数字に触れる機会を増やし、小学校教育への準備をする)。
- ・6歳児の小学校就学率の向上に貢献できるよう、学ぶ姿勢を大切に基礎教育を続け、留年せず、学



校を中退しないようにする。

- ・保護者や地域の方々などに幼児教育の重要性を理解してもらう。(幼稚園に通う子どもたちの身体的・精神的な成長を目にした保護者たちが意識を変革する。)

2. 開設に必要な条件

- ・地域に公立幼稚園、地域幼稚園がない。地域幼稚園のニーズが高い。
- ・幼稚園に通う年齢になった子どもが多い。特に5歳児が多い。
- ・幼稚園として利用できる場所がある。(小学校の空き教室、村の集会室、園舎建設用の空き地など。)
- ・地域幼稚園のボランティアの保育者がいる。
- ・地方自治体関係者とともに村人が自主運営に向けて立ち上げた「管理委員会」と保護者が協力して、幼稚園が継続して運営できる仕組みを作りやすい。
- ・地域の人・村長・地区長の協力が得やすい。
- ・CYK/CYRによる資金援助・カリキュラム作り・保育者研修の実施・指導観察などの運営支援は3年間。4年目以降は、3ヶ月に1回のモニタリングなどのサポートは継続するが、保育者給与やおやつ代などの幼

稚園運営費は地区評議会・村人が負担する自主運営に移行することを目標にできる。

- ・4年目以降に政府の行政組織である地区評議会の開発計画に組み込まれ、地区で予算を含めて運営する。また、保護者たちも少額の「協力金」提供を続けられる。
- ・スタッフが、研修やモニタリング・技術会議などで日帰りで見に行ける。

3. 開設と運営プロセス

1)候補地視察・調査

郡・州の幼児教育事務所を通して開設要請を受けると、CYKのスタッフが郡・州の教育局の幼児教育担当者と協力し、地域の方々・地区評議会に要請された現地での調査にあたる。調査ではCYKが地区長、村長、地区評議会のメンバー、地域住民の意向を確かめ、開設場所を決める。

2)管理委員会の結成と開設準備

「村の幼稚園」の開設場所を決めてから、州や郡の幼児教育担当をまじえ、「村の幼稚園」管理委員会をつくる。CYKは、この運営委員会と3年間の運営支援内

容、お互いの役割と責任、支援終了後の自主運営の継続について明記した契約を結ぶ。その後、園舎・トイレの建設・修理予算がある場合に限り、70%の建設費を支払い作業を始める。建設作業中は管理委員会のメンバーが監督。建設・修復作業が完成したら、CYKが郡・州の教育局の幼児教育担当者と共に完成した 建物をチェックし、残りの建設費を支払う。
(注 教育省が求める条件は、最低基準の床面積36㎡、通気性、採光の良い外遊具のある園舎)

3)保育者の事前研修

園舎建設の完成前に、地区評議会が選んだ保育者向けに、CYK事務所において事前研修を行う。研修内容は、管理業務(教室内の整備や飾り付け、記録や報告書類の作成方法、日課の立て方、クラスの向上計画など)と保育技術(月次カリキュラムの活用方法、10科目の教え方、教材製作、村の幼稚園5歳児の卒業テストなど)、さらに子どもの権利や育成、地域幼稚園の役割、意見交換のあり方な



ども学ぶ。
事前研修が終わり次第、郡の幼児教育担当者や近隣の地域幼稚園の保育者も一緒に教室内を整え、園児の登録を済ませて開園する。

4)保育研修
a. モニタリング研修

「村の幼稚園」の開園後、保育チームが地域幼稚園の規準となる33項目の指標を念頭に、月ごとにモニタリングを行う。それぞれの幼稚園での保育実践の観察を通

して、具体的な指導を行う。保育者の子どもたちへの教え方、子どもの名簿や出欠表の作成、日課の作成、各記録の書き方、ファイリングなど管理的な業務についてアドバイスする。また保育の質を高めるために、州と郡の幼児教育担当者、地区の担当者も協力してモニタリング研修と保育者の指導方法を具体的に話し合う。さらに子どもへの対応、保護者の協力について話し合い、問題の解決を図る。そして「村の幼稚園」管理委員会

メンバーと個別に面談し、衛生面や快適さの向上を図る。

b. 保育者の集中研修

毎年実施している10日間の研修では、モニタリング研修での難しい点、テーマに沿った時間を要する内容について集中して研修を行う。CYK保育アドバイザーが州や郡の幼児教育担当と実施するこの研修では、地区の女性と子ども事業担当と共に、幼稚園運営の課題に対する保育者の義務と責任について話し合う。具体的に保育方法と管理方法を学ぶ。難しいと感じていた日々保育計画、幼稚園の月次、年度の開発計画の作り方を学び、実際に計画を作る。また足りない教材を実際に作成する。参加者は指導の実践練習を行い、トレーナーや他の参加者からもフィードバックを得て、自らの保育に自信を持つことができる。また、郡の要請があり、郡内にある地域幼稚園の研修を受けたことのない保育者も受け入れている。

5)保育者の交流研修について

保育者同士の連携を強め、保育能力・知識向上のために、CYK/CYRが運営している村の幼稚園の

保育者に、他の地域幼稚園の訪問見学を促し、実地に保育活動を観察しながら、保育者同士が、交流する機会を得る。交流研修では、幼稚園運営の好例から子どもの指導・学び、教材製作や教室の飾り付け、毎日の保育活動プランの書き方と記録、事務管理、関連する人たちとのコミュニケーションの取り方、幼稚園の運営持続のための資金集めについて具体的に学ぶ。そして互いに新しい幼稚園運営の方法や改善点について意見交換や交流が盛んになる良い機会とする。

6)管理委員会の研修

「村の幼稚園」管理委員会メンバーが幼児教育の重要性を理解し、自分の役割と責任を理解する目的で、研修会を開催する。委員会の役割と責任、地域幼稚園のスタンダード認定取得に向けた評価方法やクラスを向上させるための年間計画の作り方を学ぶ。また委員会メンバーに、他の地区の地域幼稚園を見学し、委員会による幼稚園運営の好例から学ぶ機会を作る。そして年度末に委員会メンバーが集まり、一年間の活動内容を振り

返り、年度中に実行できなかった計画については解決策を話し合い、次年度の計画に盛り込む。

7)国際こどもの日のイベント

国際こどもの日を祝うために、各村の幼稚園では毎年5月末に国際こどもの日のイベントを開催する。会の保育アドバイザーと州・郡の幼児教育担当は参加した運営委員会メンバーと保護者たちに子どもの権利、障害・貧困・虐待などの問題への対応、差別や虐待の防止などについて説明する、そして子どもは特別な楽しいゲームや歌などを楽しんだあと、おやつをもらう。(綱引き、二人三脚、スイカ割り、かけっこ、ボール掴み、風船割り、米袋競争、卵運び、ココナツの殻ポックリ競争、水運び、椅子取りダンスなど。)イベントの後は、保護者会と委員会を行い、幼稚園に通うようになってからの子どもの変化などについて保護者と話し合う。委員会は、保護者に幼稚園の運営への協力を更に呼びかける。

8)卒園式

学年が終る前に各村の幼稚園で卒園式を行い、子どもたち全員が

「村の幼稚園」では教育省のカリキュラムに従い、下記の3時間カリキュラムを作ります。	
06:45－07:00	クラス内・外掃除 遊具教材準備 子ども受け入れ
07:00－07:30	国歌斉唱、体育・体操、列にしクラスに入る
07:30－07:50	子どもとのコミュニケーション、挨拶・礼儀・良い習慣などの仕方の紹介、実技
07:50－08:20	月曜日 絵本・紙芝居の読み聞かせ
	火曜日 Pre-writing科目、文字勉強
	水曜日 Pre-mathematic科目で、数字勉強
	木曜日 観察科目で（クラス中か外に散歩）物、自然など観察
	金曜日 美術・工作科目で折り紙、葉っぱでものづくりなど
08:20－08:40	休憩、手洗いの練習
08:40－09:10	月曜日 歌科目で、歌・踊り・詩の勉強
	火曜日 Pre-writingゲーム、文字遊び
	水曜日 Pre-mathematicゲーム、数字遊び
	木曜日 科学・実験科目
	金曜日 絵描き
09:10－09:40	月曜日 CYKゲーム紹介、遊び
	火曜日 なぞなぞ
	水曜日 自由遊び（本棚を開く）、絵本を見るなど
	木曜日 歌の練習
09:40－10:00	金曜日 詩の練習、保健衛生教育、環境整備（月末に子どもの健康チェック、身長・体重を測定し記録）
	今日の勉強の復習、子どもの服のチェック、おやつ時間（クッキー、豆乳、ゆで卵）、整列 帰宅





特別行事に参加し、たくさんの歌を披露して、保護者に子どもの成長を喜んでもらう。当会からは卒業証書と小学校用の文房具を贈呈する。卒園式を終えた後、委員会・保護者会も行う。幼稚園で問題があったら、別に委員会・保護者会を開き、皆で相談して解決する。

9)保護者の学習会

会の保育アドバイザーと州と郡の幼児教育担当者が中心になり、保育者を対象に学習会を実施し、社会経済問題が3世代にわたり与える影響や子どもの権利を説明する。また、日常作業や子どもが罹りやすい病気の症状と予防について説明する。保育者たちがトレーナーとして「村の幼稚園」保護者対象の学習会を実施する。保護者の学習会で保育者たちの果たす役割と責任を確認する。学習会に参加した保護者が、学んだことを各

家庭で子どもと一緒に実践し、怒りを抑える優しい言葉づかいをするなど、親子間のコミュニケーションを豊かにする。

10)運営責任を管理委員会と地区評議会に移行

当会による各村の幼稚園への運営支援は開設から3年間のみ、4年目以降は村人による自主運営を目標としている。幼稚園の開園前より村人とともに管理委員会を立ち上げ、委員会と保護者の協力により幼稚園が継続運営される仕組みを作る。

また、4年目以降の運営資金として保護者から毎月1ドルの協力金を集めて貯蓄するため、保護者が幼児教育の重要性への理解を得られるよう、村人全体への啓発活動も行っている。CYK/CYR運営支援の間に保護者より徴収する「協力金」は使用せずに貯蓄をし

ておき、4年目以降の自主運営移行後に使用する。

4年目に村幼稚園の運営責任を管理委員会と地区評議会に移行後、各幼稚園を4回訪問・フォローアップし、保育活動・子どもたちの勉強やクラスの様子などを確認し、運営がスムーズに行われていることを確認する。そして公立地域幼稚園認定申請に足りないものを補充する。

2023年度までCYK/CYRが開設・運営支援した34ヶ所(36クラス)の村の幼稚園のうち、23ヶ所(25クラス)が教育省の地域幼稚園スタンダードに採用されて、保育者は直接政府から給与を受けとれるようになった。しかし1ヶ所は保育者が辞めてから、代わりの保育者が見つけられずに2018年に閉園した。

表1「村の幼稚園」開設年・登録児童数、卒園児数等

州	村	開設年	自主運営移行年	地域幼稚園スタンダード認定年	子どもの出席率（最終年平均）	5歳児登録数(2023年) + 数字は他村の児童	5歳児登録率(2023年) 他村含まず	4歳児登録数(2023年) + 数字は他村の児童	4歳児登録率(2023年) 他村含まず	累計卒園児数(2023年末)	平均卒園児数(1年当り)	協力金合計額(リエルをドルに換算)
タケオ	プムプノン	2013	2016	2018		7	100%	7	100%	83	8	\$ 123
	カンダール	2013	2016	2018		5	71%	7	58%	96	10	\$ 195
	トロピエンクロライン	2013	2016	2018		19+11	100%	5	19%	180	18	\$ 159
	ブラサート	2011	2016	2018・2020		10	24%	24	57%	211	18	\$ 1,283
カンダール	ダブロム	2011	2015	2019		10+2	100%	6	67%	102	9	\$ 379
	リアンチュウ	2014	2018	2020		21+10	100%	12	63%	204	23	\$ 444
	チュティール	2014	2018開園							17	4	\$ 134
	カオム・サムノルー	2014	2019	2020		20+2	100%	18	75%	229	25	\$ 342
コンボン チュナン	カオム・サムノクロム	2014	2020	2019		18	86%	10	53%	232	26	\$ 413
	スダオカンランエン・ブラム	2015	2019	2019		23	44%	17	52%	197	25	\$ 1,013
	スバイドムナック	2016	2020	2019・2020		32	62%	43	77%	250	36	\$ 775
	克蘭リブ	2017	2021	2021	81%	8		18		65	11	\$ 492
	ブレイチュロウ	2017	2021→2020	2020	97%	32	97%	0	0%	167	28	\$ 439
	プレクリアン	2017	2020→2019	2019		23		3		107	18	\$ 482
	プロスナップ	2018春	2021→2020	2020	80%	19	90%	4	16%	122	24	\$ 405
	チョー	2018春	2021		61%	20	91%	6+3	100%	101	20	\$ 157
	クロブーブル	2018	2022	2023		12	100%	8	100%	57	11	\$ 405
	バックブノン	2018	2022→2021	2021		15+15	100%	12	80%	100	20	\$ 156
	トンレクラウ	2018	2019	2019		16	100%	16	57%	75	15	\$ 79
	コンボンバスロウタボン	2019	2022	2022	70%	22	96%	22	59%	88	22	\$ 401
	トロピエンクロブー	2019	2022		88%					98	25	\$ 303
	トクホート	2019	2022		91%					80	20	\$ 324
	ピアムボベッチ	2020	2023	2023	87%	10		22		44	15	\$ 288
	トロピエンブリン	2020	2023→2022	2022	91%	24		7		76	25	\$ 373

記録からたどる「村の幼稚園」

幼い難民を考える会の記録に「村の幼稚園」の姿が登場したのは2011年2月11日に開催された理事会である。2010年9月から12月にかけて実施した地域幼稚園の調査結果が資料として提出された。プノンペン事務所長の報告は「CYRが地域幼稚園を開くときには、最初から村人、保護者の理解を得て、何をどこまで地域の人たちが支援してくれるか、自主運営までのスケジュールなど、話し合いを十分にしてから始めたい」と結ばれている。その初志は2023年に最後の幼稚園を開設した際にも貫かれ、3園はわずか9ヶ月で自主運営に移行することを了解し、開園式の前倒しで応えた。

2011年：試験的スタート

いくつかの候補地の中から、カンダール州のタプロム村とプラサート村にCYKが幼稚園を開設することとなり、2011年6月に行われた幼稚園支援委員会との打ち合わせで、8月と9月に保育者事前研修を実施し、10月に開園することで合意している。月曜日から金曜日まで、午前7時から10時までの3時間保育とし、子どもの健康のため月に卵4回と豆乳4回の補助給食を提供することも計画されている。村に幼稚園を移管したあとも継続して運営できるよう、保護者から協力金を集める仕組みも最初から導入している。ただし、一律ではなく、委員会の意見を基に金額を設定した結果、タプロム村は登録時500リエル(0.125ドル)、月2,000リエル(0.5ドル)、卒園時3,000リエル(0.75ドル)とし、プラサート村は登録時2,000リエル(0.5ドル)、月4,000リエル(1ドル)、卒園時5,000リエル(1.25ドル)となった。いずれの村も、保護者の生活状況を知る村長が、貧しくて決定額を支払えない保護者については免除できる特約も



つけている。保育者手当は月20ドルで、タプロム村の保育者は少なすぎると不満を漏らしている一方、プラサート村の保育者は月20ドルに加えて地区からの補助金も出たため、4歳児と5歳児の3クラスある手当についても2村には格差があった。(表2 保育者手当での金額・費用負担の推移を参照)

10月14日開催の理事会では、タプロム村で29名、プラサート村で4歳児と5歳児の2クラスで60名の児童が通園していることが報告されている。登録児童数の差は、保護者の経済状態が一因であったため、2012年度の事業計画に協力金を払えない保護者には布ボールの縫製を依頼し、労賃で協力金納入をサポートする施策が盛り込まれた。年度目標として、協力金回収率90%、子どもの出席率70%を目指すこと、年に4回運営委員会と保護者会を開催し幼稚園の活動や運営について話し合うこと、定期的にも保育者ミーティング・モニタリングを実施して保育内容の見直し、保育の質を上げること、幼稚園の設備・環境を充実させる等が挙げられた。

翌年10月に日本から出張した職員の報告書には、タプロム村の保育者はより高い月給を求めて縫製工場

に転職したため、幼稚園の保育はその母親が代行していること、母親は月20ドルの手当に加えて布ボールの縫製で補助収入を得ていることが記録されている。一方、プラサートは開園当初と同じ保育者のもとに60名の児童が通園し、協力金も設定どおり支払われていることを確認している。

2012年はこの2園の運営を注視しつつ次の展開に備えた。

2013年以降：毎年新規に開園

2013年にはタケオ州の3村に「村の幼稚園」を開設し、翌2014年はカンダール州の4村に新たな「村の幼稚園」を開設するなど、以後、毎年2園ないし3園の「村の幼稚園」を開設する活動を重ねた。2016年1月の理事会では、タプロム村は保育者が辞めて後任が見つからず他園の保育者が交代で保育を行っている上に、協力金の集まりが悪いため、自主運営への移行が難しいことが報告された。2014年開設の4園については、3園は子どもの出席率、協力金の集まりもよいが、チョティール村の幼稚園だけは出席率も協力金の集まりも悪いため、2年後の自主運営に不安があると報告。



2016年7月の理事会では、地域が自主運営する「村の幼稚園」第1号となったプラサート村で4月に移管セレモニーが行われたことが報告された。保育者の後任不在に悩むタプロム村に関しては、結果としては、地区長の要請で交代の保育者が専任となり、2017年4月地域に移管した。このタプロムとチョティール村を除く7園は大きな問題もなく運営されていることも報告されている。チョティール村の出席率と協力率の集まりが悪い原因は、病気がちの保育者が幼稚園をよく休むことにあることが判明し、運営委員会と対策を話し合っていることも報告されている(残念なことに保育者は亡くなり、チョティール村の幼稚園は閉園した)。

2016年以降：地域での継続運営

2016年11月の理事会では、地域に移管されたプラサート村の幼稚園の現状が報告された。小学校に倣って地域幼稚園にも10ヶ月分の予算しかつかないため9月と10月は休園していることや、補助給食が毎日提供できないため子どもの出席率が下がっていることが確認された。また、小学校の敷地内に開設した3

園では、9月と10月は小学校が休みになる影響で幼稚園の子どもも休んでしまう実態が報告されている。結果的に、出席率と協力金の集まりも伸び悩んでいる。委員会と相談し保護者会を開いて子どもの通園を呼びかけたが効果がなく、子どもが登園しない2ヶ月間、保育者は教材制作に専念している。こうした小学校の開校状況に幼稚園への通園が左右される状況に対し、村全体の幼稚園に対する評価を上げ、より積極的な参加をと、行事(6月国際子どもの日、10月卒園式)と合わせて保護者会を開催するようになった。

2017年：評価指標の導入の試み

いくつかの幼稚園が地域に移管されて運営が継続される事例が増えてきたことから、「村の幼稚園」事業の成果を評価し、より効果的な運営に繋げる試みが検討された。

7月31日の理事会で共有された「村の幼稚園」の評価指標
①5歳児の登録率70%。
②登録児の80%が手洗い、安全な飲水、トイレの使用などの衛生習慣を身に付ける。
③卒園時にクメールアルファベット文字の70%を認識できる。

④小学校1年生の留年率ドロップアウトの率が、幼稚園ができる前より下がる。
⑤保護者からの協力金年間60%徴収。
各指標は数値的には報告されていないケースが多い。しかし、幼稚園管理委員会との契約内容を比較すると、「村の幼稚園」事業の初期とこの時期では保育環境の充実に努め、自主運営に向けた準備を拡充していることがわかる。

2018年以降：関係者の能力強化に注力

2018年9月、CYKは教育省を退官したオム・ソパニー氏を保育アドバイザーに迎えた。これを機に開園前の事前研修で保育者が学ぶ幼児教育に関する学習内容が体系化した。

モデル幼稚園を訪問し、見学後に意見交換を行う保育者交流研修も恒例となった。(表4 見学研修会実施記録参照)

2019年には地域幼稚園スタンダード認定制度にいち早く対応した10日間の能力強化研修を開始し、2020年～2021年のコロナ下では遠隔学習を開発して保護者に子どもの学習方法を教えるなど、次々と保育者や保護者が学ぶ機会が増えた。(表3 10日間能力強化研修会実施記録参照)

ソパニー氏は州や郡の幼児教育担当者を研修のトレーナーにすることで、彼らの指導能力と自信を底上げした。

教育省の方針に沿って関係者の能力強化を推進した結果、2018年に地域で自主運営されている元「村の幼稚園」6園が地域幼稚園スタンダードに認定され、保育者6名に教育省から直接給与が支払われるようになった。未払いや給与額の地域差といった問題が解消され、以後、毎年3～5園が認定を取得している。CYKが事業を終了したあとも、地域が開催する認定園対象の研修に保育者が参加している。

表2 保育者手当の金額・費用負担の推移

年度	支援中の幼稚園				移管後の幼稚園			
	CYKが支払い		地区が追加で支払い		地区が支払い		教育省が支払い	
	園数 ()内はクラス数	手当額(ドル) 1 保育者 当り	園数 () 内 はクラス数	手当額	園数 () 内 はクラス数	手当額	園数 () 内 はクラス数	給与額
2011	2 (3)	20						
2012	2 (3)	20	1 (2)	12. 5				
2013	5 (6)	20	1 (2)	12. 5				
2014	9 (10)	30	4 (5)	12. 5-25				
2015	10 (11)	30	5 (6)	12. 5-37. 5				
2016	10 (11)	40	5 (6)	12. 5-50	1 (2)	50		
2017	8 (9)	40	8 (9)	12. 5-90	5 (6)	75		
2018	8 (9)	40	10 (11)	25-100	7 (8)	37. 5-100	4	162. 5
2018	10 (11)	40	10 (11)	37. 5-100	5 (5)	37. 5-100	4 (4)	162. 5
2019	9	40	9 (9)	35-97. 5	6 (7)	100-125	8 (10)	167. 5
2020	5	40	5 (5)	60-97. 5	5 (5)	75-125	14 (16)	167. 5
2021	5	0	5 (5)	60-97. 5	5 (5)	75-125	16 (18)	167. 5
2022	5	0	5 (5)	97. 5-137. 5	7 (7)	75-137. 5	16 (18)	177. 5
2023	8	0	8 (8)	120～162. 5	7 (7)	75-162. 5	20 (22)	177. 5
2024					13 (13)	75-162. 5	22 (24)	192. 5

表3 10日間能力強化研修会実施記録

実施期間	参加者人数		トレーナー	研修から学んだこと
	保育者	女性と子ども担当		
2019年8月27日～9月5日	5 名+10名	6名	州と郡から5名	子どもとの接し方、管理業務、3 科目の指導方法 (exercitation, 言葉、科学)、日案作成、5歳児テストの仕方を学習。教材と教室の飾りを制作
2020年6月25日～7月4日	6 名+10名	9名	州と郡から6名	幼稚園運営の課題に対するそれぞれの義務と責任、新カリキュラムの実践方法、教材制作の方法、教室の開発計画作成、CPVOD19感染拡大に対応した遠隔教育のガイドライン
2021年10月20日～29日	9 名+9名	9名	州と郡から6名	幼稚園運営の課題に対するそれぞれの義務と責任、教材の制作と活用方法、教室の開発計画作成、5月から7月分の教材制作
2022年12月19日～28日	8名+7名		州と郡から7名	教え方のテクニック、教材の使い方、指導計画と教室の開発計画作成方法
2023年11月16日～25日	8名+24名		州と郡から8名	保育者の義務と責任、日毎・月毎カリキュラムの使い方、教室の開発計画 (日・月・年)、日案の書き方、各レッスン (動き、数字、言葉、科学、ゲーム、日課、物語を話すこと、歌、詩、絵) の指導方法、5歳児テストの内容とツールを使った実施方法

表4 見学研修会実施記録

見学日	参加者人数		見学した幼稚園	見学から学んだこと
	保育者	幼児教育担当者他		
2020年2月3日	5 名	州1名、郡4名	Neakta Po CPS	子どもとの接し方、良い教え方、手近な材料で制作した教材、壁の教材掲示方法
2020年2月24日	6 名	郡4名	スダオカランラエン・プラム (元「村の幼稚園」)	教材、指導計画、記録類が揃っている。柔らかない声で穏みなく教えているが、説明が順を追っていないので何を教えたいかわからなかった。コミュニケーションが良くとれていて、子どもは物怖じしていないし、衛生状態が良い。幼稚園によって保育の質に違いがある。 良い点を取り入れ、弱い点も参考にする。
2021年2月25日	9 名	州1名、郡5名	Cheang Loung CPS	子どもの集合力、規律を保つ方法 (席替え、気分転換の活動、グループに分け遅刻せず登園し先生の話を聞く子どもを日替わりでリーダーにする、など)
2022年3月3日	6 名	州1名、郡4名	プレクリアン (元「村の幼稚園」)	子どもに規律や集団内にとどるべき態度を教え、必要であれば保護者の協力を得ること。クラス中に良くない行動があれば、その都度、叱らずに良い行動を促す。
2022年10月18日	8名	州1名、郡6名	Kbal Thno1 VPS	毎朝クラスのルールを確認し良い言葉づかいを促す。子どもはグループに分かれ、教材準備を手伝う。集中が途切れたときは3-4分、ゲームや歌で気分転換する。創意工夫をこらして常に新しい活動を提供し、子どもがレッスンに集中できるようにする。教える時間が足りなくならないよう、準備は始業前に行う。
2022年10月19日	9 名	州7名、郡8名+委員会メンバー15名	Phum Tmey VPS	保護者から必要物品を募ったり、他の幼児教育従事者からアイデアをもらう。欠席しがちな子どもたちの保護者と話す。問題が解決できないときは村長や委員会、女性と子ども担当者に相談する。家族からの支援を得ながら、個人的にも時間とお金を投じて、忍耐強く、懸命に働く姿勢。
2023年10月10日			Antong Beak and Bor Khmong CPS	
2023年10月11日			Mot Beam PS	

エピソード「村の幼稚園」①

幼稚園運営委員会の強い想い ～村の全世帯で協力し合う～

幼稚園開設に至らなかった地域

「村の幼稚園」開設の要請は、通常、州の教育局から「幼い難民を考える会」に提出されます。調査したが幼稚園の開設に至らなかった地域は、調査した地域の約55%になります。「村の幼稚園」を訪問したことのある当会の現地の支援者から、2016年にコンボンスプー州の村に幼稚園開設の要請を受けました。最初の調査では、支援者や地区長からも地域の状況を聞き、地区内の山にあるお寺には、近くの3村の人たちが集まるのでこの村に幼稚園をとのことでした。2回目の調査では、郡の幼児教育担当者と地区の子どもの担当者からも、縫製工場やマンゴ畑で働く村人の状況やおばあさんに預けられる子どもの様子などを聞きました。その後、幼稚園管理委員会、地区長とも再度話し合いを持ちましたが、地区評議会は保育者給与の半額の支払いについては消極的でした。NGOに全額を支援して欲しいとの考えで、ぜひ一緒に幼稚園を作っていこうという熱意が感じられず、開設を諦めた地域でした。

すべての家庭の協力を

幼稚園管理委員会が工夫して資金集めをしているのが、コンボンチュナン州のコンボンバスロウタボン村です。委員長には、多くの場合地区長になりますが、この村の委員長はお寺の世話役のリーダーです。土地面積の広いコンボンバスロウ村を二つに分けた隣村の小学校の中に地域幼稚園を開設しました。地区長がもう一つの村にも幼稚園をぜひ開いてほしいと積極的にお願いして、委員



長を引き受けてもらったのです。

幼稚園の開設にと寄贈された土地は川べりの土地でしたので、土の埋め立て、園舎の敷地の堀作りなどの費用が必要でした。委員長や村長は、村の人たちに呼びかけて園舎を建設する土地に石と土を埋め立て地盤整備を行いました。お寺のお坊さんにもお願いしました。委員長は、長年お寺の世話役としてお寺のために資金集めをしてきたので、お坊さんたちの信頼も厚く、一人のお坊さんから幼稚園のためにと1,000ドルの寄付を受けたのです。

この委員会の資金集めの特徴は、村の全世帯にご寄付をお願いすることです。委員会内でグループを作り10世帯ずつを回ってお願いします。子どものいる世帯もない世帯も協力し合えるように村の中の400余りの全世帯が対象です。ある時親がそのような寄付に協力しなかったことを知った子どもが親に文句を言って、自分でためた小遣いから寄付しようとしたこともありました。最初は村全体に呼びかけても500ドルも集められませんでしたでしたが、2023年に自主運営を始めてから協力が増えてきました。

園庭に敷くセメント代の寄付をお願いしました。できれば1家庭2万リエル(5ドル)をと。実際には、3万リエル(7.5ドル)、5万リエル(12.5ドル)を協力した家庭も多くありました。園の入り口までセメントを敷くことができ、入り口には、男の子と女の子が楽しそうに勉強しにくる像を作りたいそうです。

委員長は、人に会えば必ず幼稚園のための寄付をお願いしています。血液検査に行った際に、医師に話をして100ドルの寄付を受けたこともありました。

子どもの将来、地域の発展

お寺の支援も続けている委員長の話です。「カンボジアでは、お寺に寄付をする習慣があります。子どもたちの未来への寄付も必要だと話すと、最初は協力しなかった人も寄付をしてくれるようになりました。幼稚園から小学校への教育を受けられれば、年間40人から50人がその後も学校を続け育っていきます。そして将来、働いて地域を開発し、貧困を減らし、誰もが住みやすい豊かな社会にすることができます。」

エピソード「村の幼稚園」②

親の協力でおやつを提供 ～クラス運営委員会～

子どもたちのおやつは、会が豆乳やクッキーをプノンペンでまとめて購入し、それぞれの幼稚園に届けていました。地域でまとまった数があり、取り扱いやすく、また日持ちのするものを手に入れることが難しかったためです。会としても、地元で衛生に留意した栄養のある野菜や果物のジュースなどをおやつに出せないか検討もしていました。そのような状況の中、2023年に教育省から、学校内にある売店での食品販売についての安全性と子どもの健康促進の方針が出されました。そのため「村の幼稚園」の補助給食は、地元の食品を保育者の責任で子どもたちに提供する形に変更しました。この村の幼稚園での実施を先取りして始められたのが、コンボンチュナン州のトクホウト村の幼稚園の取り組みです。

この幼稚園は、2022年10月から始めた自主運営を契機に、親がメンバーになってクラス運営委員会を始めました。委員会では、親がおやつ代を集め、地元で購入して子どもたちに提供しています。今まで保護者からの協力金で週2日はおやつを出しているという幼稚園は、いくつかあります。しかし、トクホウト幼稚園での取り組みは、クラス委員会を作り、親がお金集めからおやつメニューを決め、自分たちで子どもの人数分のおやつを購入し、子どもたちに提供するという親の積極的な関わり方が画期的です。

親の協力をまとめた幼稚園委員会

この委員会が始まるきっかけは、2022年に実施した幼稚園運営委員会のための訪問学習会です。トクホウト村のメンバーが訪問先の幼稚園でのこの取り組みに強い関心を持ち、自分たちの幼稚園でも是非実施したいと考えました。月々20,000リエル(5ドル)の協力を保護者にお願ひし、自主運営に移行したあとも、子どもたちのおやつを続けて提供していこうというものです。それも、保育者がやるのではなく親がお金を集め、親がおやつを準備します。

しかし保護者の協力を取り付け、実際の運営に至るまでには、半年近くの時間がかかりました。最初に保護者会を開いて、クラス運営委員会を立ち上げようという話をしたとき、親の半数しか同意が得られませんでした。その後も何度か保護者会を開き、クラスの親全員に知らせました。子どもの健康のためにもおやつを出していくことの必要性と、それには全員の親からの協力がないとクラスの子どもたちへのおやつを提供を進められないことを話し合いました。クラスの親全員に周知し、4、

5ヶ月かけて運営委員会と地区長が協力金を払っていない家庭を訪問して親を説得し、ようやく保護者全員が参加するようになりました。

地元でおやつを準備

クラス運営委員会の保護者は、どのようなおやつを子どもたちに食べさせたいか話し合いました。バナナやトウモロコシ、もち米とココナツミルクをバナナの葉に包んで蒸したものや肉と野菜を小麦粉で揚げたお菓子など、栄養があり、安心して食べられる馴染みのあるもの、好きなものを、予算に合う内容で考えて子どもたちに提供しています。

幼稚園運営を支える意識

保護者が協力してクラス運営委員会の活動を担うことにより、幼稚園の運営を支えているという意識も高まっています。保育者とのコミュニケーションも広がり、おやつ感想や幼稚園や家庭での子どもの様子について、よく話をするようになりました。子どもの変化や成長する姿に幼稚園の活動が大事という教育への理解が少しづつ深まり、クラス委員会への協力も続いています。



エピソード「村の幼稚園」③

保育者への信頼

～より良い保育のために学ぶ～

保育者の仕事への理解と協力は、保育者の仕事ぶりやコミュニケーションの努力によるところが大きいといえます。どの保育者も難しい保育計画を準備し、活動に集中できていない子どもへも気を配り、子どもたちが、楽しく学べるよう心がけています。

日々の保育への準備と子どもへの対応

プロスナップ村の幼稚園のポー先生は、保育計画を毎日きちんと立てて日々の保育の準備をしています。3月の訪問時には、子どもたちの注意を集めながら10までの数を身近にあるものを使って数えるグループ遊びをしていました。グループの中で、一人ずつ10までの数を数えて一通り数え終わると、先生に呼ばれたグループの代表が順次前に出て、使っていた貝殻や竹棒などを一つひとつ数えてみせていました。何回も繰り返し数えていると、自然に子どもたちも10までの数を数えられるようになっていました。

先生が、数の遊びを始める前にクラスの子どもたちに遊びの説明をして、数えるものを選ばせると、子どもたちは、すぐにグループに分かれて遊びを始めました。グループでの遊びに慣れている様子がうかがえました。黒丸の数とその数に合わせたクメール語の数字が書かれているカードも使われていました。クメール語の数字はどんな形をしているのかも知ることができました。

先生は、遊びに使う小さいバスケットと貝殻や輪ゴム、竹の棒などの数を揃えておき、子どもがすぐに遊びを始められるよう準備して、保育の手順と



全体の流れを考えながら、とても手際よく保育を進めていました。

数の遊びのあと、先生は、顔に大きな擦り傷のあった子どもを前に呼んで優しく質問して話を聞きました。「どうして顔に怪我をしたの？」子どもは、家で食事の後片付けをしていたときに転んだと答えました。、「お母さんはその時、何といましたか？」子どもは、お母さんや家族の対応について、先生の質問に一つずつ答えていました。クラスの子どもたちも、顔に怪我をした友だちのことが気になっていました。子どもたちは、先生の質問に怪我をした友だちがどう答えるのか関心を持って聞いていました。先生は、その日の保育の流れの中で、臨機応変に怪我をした子どもの話をクラスの子どもと一緒に聞いて、その痛みを思いやり、怪我をしないように気をつけることも話したのです。

保護者の協力と地域の理解広がる

ポー先生は新しい保育技術を学び、保育の質を高めていけるよう郡の教育局が開催する月1回の技術会議にも必ず出席しています。

このように熱心に学ぶ先生は、保護者からも厚い信頼があります。自主運営が始まると保護者からの協力金が少なくなる幼稚園が多い中、プロスナップ幼稚園では、世帯当たり月4千リエル(1ドル)から月1万リエル(2.5ドル)に増やした協力が続いています。

幼稚園を訪問した地区長と村長に先生が、部屋が狭いので、備品や教材を置く場所が必要と話したことがありました。現場を見ながら、話を聞いたので、その必要性と費用などが検討され、半年後には幼稚園の裏にもう一つの部屋ができあがりました。3年間の保護者の協力金約1,000ドルと、足りない費用は地区評議会と保護者に協力をお願いしてできたものです。日頃の保育者と地域の方々の信頼関係ができていたからに他なりません。

エピソード「村の幼稚園」④

幼稚園運営の安定と更なる発展

～地区の子ども担当者の後押し～

「村の幼稚園」の管理委員会のメンバーには、地区評議会の女性と子どもの担当者がいます。貧しい家庭の子どもや妊産婦、新生児についての仕事を担当し、地域の女性と子どもの状況をよく知っています。通常、村の幼稚園との関わりでは、幼稚園への定期的運営調査、4、5歳児のいる家庭への幼稚園登録の働きかけ、幼稚園の運営状況の地区評議会の定例会議への報告などを行っています。

カンダール州カオムサムノー地区には3村があり、CYRの支援で2014年に「村の幼稚園」が開設されました。リアンチュー村とカオムサムノール村の2村の幼稚園がそれぞれの小学校の空き教室に開かれました。もう一つのカオムサムノークラオム村では、小学校の高床式の下空間に幼稚園クラスを作った小学校の校長先生の強い要請で開設されました。

この地区の子ども担当者のスイ・コーンさんは、この仕事に長年携わり、2003年の地方選挙のあとには、子ども担当の仕事しながら副地区長になりました。地区内の3村のすべての幼稚園の運営に力を入れていこうと協議を進めていました。

コーンさんは、お母さんたちに5歳児の幼稚園への登録を奨励します、幼稚園での活動を通して子どもが学ぶことで、その先の教育への機会が広がります。子どもの将来を左右することを話し、親の理解を得ました。協力金を払えない貧しい親に自分のお金で支援したこともあります。女性の問題をよく聞いて解決に当たるので、頼りにされ地区の行事でボランティアの力が必要などときには協力も得ています。

同地区評議会では、2019年当時としてはめずらしく3村の幼稚園に対して教材制作費の予算年間各225ドルを確保しました。2村の幼稚園では、早速セメントの床にプラスチックのシートを敷くことができました。カオムサムノークラオム村の幼稚園では、1年分の教材を作りました。文字や数字、母音のポスターも購入しました。

また保育者には、地区評議会の会議に出席して問題や課題を報告する機会を作り、問題解決を図れるようにしています。そのため会議に参加するときの交通費2.5ドルも払われるようになりました。

保育者の月給の額も検討されました。2014年からの会の支援のあった3年間には、地区評議会からは12.5ドル支払われ、合計52.5ドルでした。園が自主運営に移行した4年目からはその額を75ドル、100ドル、125ドルに上げました。教育省が地域幼稚園を対象に始めた認可制度で3園とも認可され、2019年、2020年からは保育者の給料が直接政府から払われるようになりました。管轄の地域行政として、幼稚園の運営を

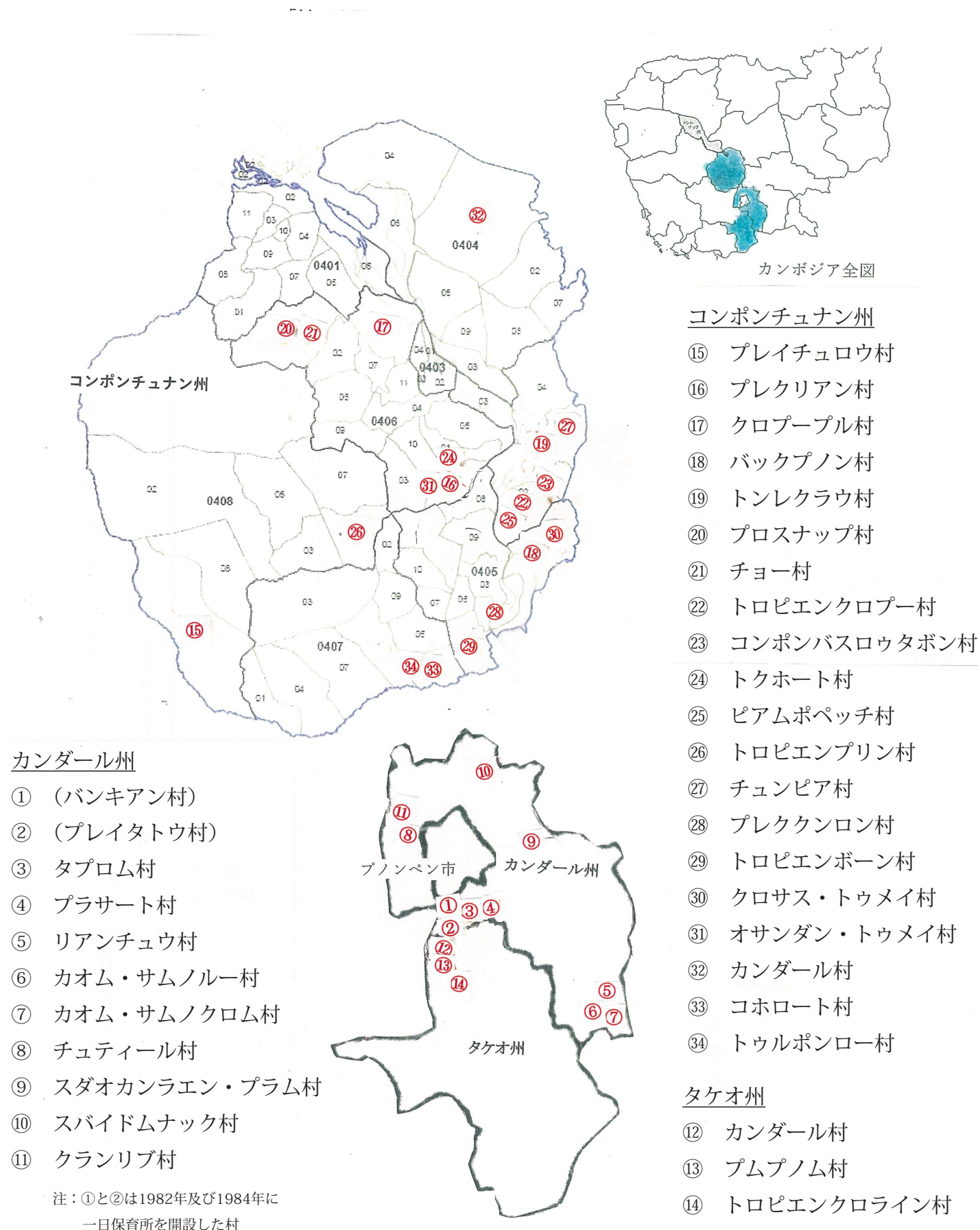
いかにサポートできるかを考え実践してきています。

小学校の建物の高床の下に作られた幼稚園では、雨季に雨水が30センチもの高さまで入ってしまったことがありました。校舎が老朽化していたこともあり、熱心な校長先生は州知事の訪問時に5クラスの小学校校舎を要請しました。要請が受け入れられ、校舎は2020年に完成し、校長先生は、扇風機のついた新しい広いクラスを幼稚園のクラスとして使えるようにしました。

カンボジア政府は、全国に拡大している地域幼稚園の運営が継続して展開されていくように、地区評議会への予算を増やしています。それでもまだまだ内容が限られ、申請してから使えるようになるまでには時間がかかります。同地区では、幼稚園のための活動計画と必要な予算を毎年更新して申請しています。地域の3村の幼稚園運営の充実と発展のために、地区の子ども担当者をはじめ、小学校や親の協力が広がってきています。



「村の幼稚園」 開設地域地図



ギャラリー「村の幼稚園」①



タプロム村 2011年 地図③



プラサート村 2011年 地図④



カンダール村 2013年 地図⑫



プムプノム村 2013年 地図⑬



トロピエンクロライン村 2013年 地図⑭



リアンチュウ村 2014年 地図⑤

ギャラリー「村の幼稚園」②



カオム・サムノルー村 2014年 地図⑥



カオム・サムノクロム村 2014年 地図⑦



チュティール村 2014年 地図⑧



スダオカンラエン・プラム村 2015年 地図⑨



スパイドムナック村 2015年 地図⑩



克蘭リブ村 2017年 地図⑪

ギャラリー「村の幼稚園」③



プレイチュロウ村 2017年 地図⑮



プレクリアン村 2017年 地図⑯



クロプーブル村 2018年 地図⑰



バックプノン村 2018年 地図⑱



トンレクラウ村 2018年 地図⑲



プロスナップ村 2018年 地図⑳



チャー村 2018年 地図㉑

ギャラリー「村の幼稚園」④



トロピエンクロプー村 2019年 地図②②



コンボンバスロウタボン村 2019年 地図②③



トクホート村 2019年 地図②④



ピアムベッチ村 2020年 地図②⑤



トロピエンプリン村 2020年 地図②⑥



チュンピア村 2021年 地図②⑧



プレククンロン村 2021年 地図②⑧

ギャラリー「村の幼稚園」⑤



トロピエンボーン村 2021年 地図②⑨



クロサス・トゥメイ村 2022年 地図③⑩



オサンダン・トゥメイ村 2022年 地図③⑪



カンダール村 2023年 地図③⑫



コホロート村 2023年 地図③⑬



トゥルポンロー村 2023年 地図③⑭

幼い難民を考える会 ― アジア紛争の歴史とCYRの歩み



写真©小林正典

CYR設立の背景

1975年4月、内乱と紛争が続いたカンボジアで、社会主義共産化の理想を掲げた波尔・ポト派が政権を握りました。農業主体の共同社会をめざした同政権は、直ちに都市住民を集団農場へと送り込み、厳しく管理しました。後でわかったのは、波尔・ポト政策に反した知識人への拷問・虐殺・処刑によって有能な人材が失われ、疲弊したカンボジアの復興に大きな問題を残した事実です。しかし4年後には、ベトナム勢力がプノンペンに攻め入りました。強制労働を強いられて苦しんだ10数万人の市民は、解放後の社会混乱の中、銃声が響くジャングルを経てタイ国境へと向かったのです。

1979年11月、タイ・カンボジア国境へと逃れ出た避難民の悲惨な状況を、自分の目で確かめたいとタイ国境に向かった日本人、いいぎり ゆき(後のCYR設立代表)が見たのは、カンボジア国境から50kmのサケオの町外れに、タイ軍の大型トラックが泥の塊のような避難民を地に降ろす光景でした。タイ内務省とUNHCR(国連難民高等弁務官事務

所)が共営するカオイダン難民収容所が開設される直前のことでした。地に降ろされたまま動けない人びとのうずくまる姿があちこちにある仮収容所前。この収容所内には、すでに3万人を超える避難民(国際法上の難民ではない)がおり、名ばかりの病棟で3,000名余りが治療中、別棟では布に包まれた新生児がたくさん並んでいました。混乱のさなかに生きる小さな命、その育つ力を守りたい、これが多くのボランティアの思いでした。

1980年2月、幼児の心身の発達に関心を抱き、これまで幼児教育の研鑽を続けてきたいいぎりは、子どもの成長こそ将来の平和への道づくりだと考え、日本に戻って、難民支援、ことに、幼い子どもの発育を守り、難民となった人々を支えようと緊急アピールを出しました。その結果、保育関係者・社会人・学生・企業・組合など、全国から多くの善意と協力が届けられ、「幼い難民を考える会」が誕生しました。この「幼い難民」の名称は、子どもを一人前の人格と捉えた上で、活動を通して学び、深める行為を意識して「考え

る会」としました。

難民キャンプで暮らす 家族と子どもたち

一時期13万人を超える難民を収容したカオイダンは、住民の出入りを許さない有刺線に囲まれた場所で、区画ごとに並んだ住まいは竹と椰子の葉でできており、生活に必要なもの、水、食料、燃料など、すべてが配給でした。

1980年12月CYRは、カオイダン・キャンプに最初の保育センター「希望の家」を建て、保育者となる難民の養成準備を始めました。越境する難民が増え続けた当時、子どもの数も増える一方で、受け入れ態勢ができていないキャンプ活動には心配の種がいくつもありました。「希望の家」では、学校教育も限られ、保育について学んだこともない、若い人たちが保育に関われるように、経験者が未経験者と一緒に必要なプログラムを検討する日が続きました。祖国の将来を担う子どもの成長を促す。そのためには子どもが楽しんで学べる教材づくり、健康康管理、生活習慣を重んじながら、他人への思いやりを大切にする指導法を選びま

した。13年間に7,833名の子どもたちが学んだ「希望の家」の実績は、教員養成の新しい方法に応じた教育現場の実現でした。

保育の手引き：クメール語版・英文版・日本語版の刊行

1980年10月、「希望の家」のカンボジア人保育者と日本人・タイ人からなるCYRのボランティア職員は、連帯の絆に「子ども」の存在をおき、遊ぶ、学ぶ、育つ環境の整備に集中し、教材づくりの一環として、カンボジア人によるクメール語ハンドブックの編纂を始めました。生き生きとした子どもたちの写真とイラストがふんだんに入ったクメール語による「保育の手引き」は1981年に完成。タイ国境沿いの難民村でも使われました。

その後、子どもの成長・発達に深く関わる保育者や親のために、難民キャンプでの実践を元に子どもの成長、栄養や保健衛生、遊ぶ教材の作り方をまとめた内容で、英語版とカンボジア語版「保育のハンドブック」が1992年に刊行され、カンボジア国内の保育者の研修などに広く使われてきました。またUNESCOや子どもと地域をサポートする財団を通して、他国の同様に恵まれない地域の保育に役立てられました。

さらに「保育の手引き」クメール語版から日本語版への翻訳・出版が完成したのは2004年9月。1980年代にCYRボランティアとして難民キャンプ活動に関わったメンバーが、後に東京外国語大学で教鞭をとるかたわら、同大学カンボジア語専攻の学生グループを励まして、日本語版刊行の運びとなりました。

タイ国境被災村での新たな活動

1988年、タイ・カンボジア国境



写真©小林正典

沿いの地域には、カンボジアの紛争による戦闘で被害を受けた村が点在していました。CYRでは、あまり外の世界には知られていない、タイ被災村での被害状況を調べていました。自分の国の子どもの生活環境を自分たちの手で改善したいと、タイ人職員4名が自主的にグループDEC(Development and Education for Children)を組織して、動き出したのは1990年8月です。カオイダンで手がけた仕事で学んだことを活かさないか。そしてサケオ県の特に貧しいパライ村とノンヤプロン村をはじめ、地域の評議会が運営する保育所を対象にして、いくつかの提案をしました。例えば、保育に役立つ教材づくり、その使い方、保育のあり方のトレーニングなどです。難民

キャンプでの経験を大事にしていたタイ人や日本人職員が、村人との信頼関係を築こうと、子どものおやつづくり、野菜の栽培などを村人と一緒に作り伝えました。さらに地域行政と協力して、アランヤプラテート郡の17保育所の定期的な合同研修や移動図書や県内全域の保育所の保母たちの研修会も開催しました。タイDECの職員はネットワークづくりを通して保育への理解を深めた保母たちの学ぶ意欲に励まされながら、活動を2000年まで続けました。

カンボジアの再生と地域保育所の 自主運営

1991年10月、カンボジア紛争の政治的解決として成立したパリ和平協定によって、20年以上続いた内



戦が終わり、タイ・カンボジア国境の33万人あまりの避難民の帰還が始まりました。カオイダン難民キャンプの14,000人も、1992年の4月から11月の間にカンボジアに帰還しました。当時カンボジア国内には、国連機関や世界からの支援がほとんどなく大変厳しく貧しい状態でした。

活動13年目に入っていたCYRは、カンボジア国内での新たな活動態勢に対応したCaring for Young Khmer(CYK)の名のもとに、1991年、事務所をプノンペンに開きました。子どもと母親の生活環境向上をめざした諸活動(保育所運営、保育者養成、家庭相談員養成、医療協力、小学校校舎建設・修復など)を始めました。いずれも自主運営に焦点を合わせた活動です。プノンペン近郊では、プノンペン市立病院に働きかけ、巡回診療、予防接種、乳幼児の身体測定なども行いました。

プノンペン市サムロンクロム地区では、1992年にトロピエンタヌン地域保育所、1993年にチェンメン地域保育所を開設し、約80名の子どもの保育を2005年まで続けました。両保育所は、地域での自立をみ

すえ、カンボジアの団体、カンボジア女性開発協会(CWDA)をパートナーに保育所運営を一緒にを行い、問題点の解決に協力しました。しかしパートナー団体が資金難で事業から手を引くことになり、その後の自主運営の見通しが難しく、保育所の閉鎖を検討しました。さらに、プノンペン市教育局と協議し、2保育所の子どもたちが、保育所の閉鎖後に通えるようにしたいと、地区内の小学校の中に公立テッカボンヨ幼稚園の開設を支援しました。その後も保育者の不足を補おうと、経験のある元トロピエンタヌン保育所の保育者を派遣するかたちでアシスタント保育者の勤務をサポートし、外遊具の設置や保育教材の提供、保育者の研修などを2013年まで行いました。

1992年1月、最初の保育所開設はカンボジア女性協会とユニセフとの話し合いにより、カンダール州プレイタウ村に、1994年にはバンキアン村での保育所開設が決まりました。当初、会からの資金協力は、4名の保育者の手当て、米100kg、給食・教材費を含む月額350ドル。保育者研修では、子どもの身体の発達と栄養、遊びの効果、遊具づく

りに焦点を置きました。2005年になって自主運営を目指す運営委員を選び、予算・保育料の見直しや村民への小規模貸付けを始めました。保育料は日に100リエル(2.5セント)のレベルでしたが、10年後の2015年には2500リエル(62.5セント)となり、2施設の年間保育料総額は2243.5ドルを記録しました。保育所の収入を増やそうと、保護者の協力を得て給食用野菜収穫、養魚、米作りを数年続けました。委員会が力をいれたのは、村民への小規模貸付で、11年間に16,000ドル余りの利息を得ましたが、2ヶ所の保育者給与充当額は月平均41ドルに留まり、自主運営への挑戦は実現にはいたりませんでした。

プノンペンのスラムで

現地NGOとの協働

貧しくて農村では暮らせず、プノンペンで仕事を見つけて、スラムで暮らす家族はたくさんいます。2002年、スラムで女性の保護と自立、子どもの支援を行い保育所を運営していたカンボジアのNGOケマラから、資金難のため閉鎖した2ヶ所の保育所の再開支援を求められま

した。2003年、同保育所2ヶ所の運営支援として、保育者の人件費も含め保育者研修、教材提供などを始めました。また、どの地域でも働く親たちが安心して子どもを預けられる場所がないこともわかりCYKはスラムの別の村4ヶ所で保育所の設置と運営への協力を2012年まで続けました。都市部の地価は高く、公有地の使用が限られる状況にあるため、高い家賃の支払いは保育所運営の上で大きな負担になっていました。このため会では、ケマラから独立した2ヶ所の保育所の運営が続けられるようにと、米や豆乳を支援して自主運営の援助を2020年まで続けました。

公立幼稚園との関わり

小学校が遠いため小学校を建ててほしいという地域の要請を受け、2005年にはプノンペン郊外のプノンベントゥメイ地区トロピエンスパイ村に幼稚園クラスを含む3教室の小学校を建てました。2007年には6年生までが通えるように、小学校6教室2階建ての校舎を建てました。この村の住人は、市内の中心部のスラムから強制的に移住させられた人たちです。事業開始前の地区の98世帯の家庭訪問調査では、食事也十分とれず、病気の治療が受けられない、その日暮らしの家庭がほとんどでした。そのためCYRは、2015年まで朝給食の提供、歯科検診、健康診断、布ボールづくりを委託しました。事業終了時には近隣の5村から800名近い子どもが通ってきました。

2003年の時点では、会の限られた人材と資金をさらに活かそうと、カンダール州のほとんどの既存の公立幼稚園の状況を調べました。その結果、保育者指導・養成の不足、建

物の老廃化、保育教材の欠如に向けた対策が急務だと判断し、予算が限られている州の幼児教育局と合同で、郡ごとの巡回研修や全州の保育者を対象にした様々な研修や保育教材、外遊具、教材棚、図書箱を提供するなど、の協働作業に取り組みました。

カンダール州では2004年から7年間、154の公立幼稚園を支援の対象とし、335名の保育者が学びました。

その後、教育省幼児教育局の要請があり、僻地を中心に支援が必要な13州にある公立幼稚園で働く保育者を対象にして、州ごとに教材研修と教材配布をしました。

またカンボジア政府が、2008年から2016年に全国に開設した1,451ヶ所の地域幼稚園全てに保育教材のセットを研修し提供しました。教材として子どもたちに特に喜ばれ、今も続けて使われているのは、布人形・ボール、木製パズル、絵本、文字と数のパズル、クメール文字カードなどの全てです。カンダール州での事業を含め、2004年から19年の間に研修に参加して学んだ保育者は6,825名を数えます。

半日保育の「村の幼稚園」

長い内戦が人々の暮らしと経済に落とした影響は計り知れないものがありました。カンボジアの復興・開発がすすめられていく中、会は、これまで30年余りの間、教育省・地区委員会、地域住民・保護者と連携して、カンボジアの幼児教育の充実と基盤づくりに関わってきました。カンボジアのNGOに協力してスラムの保育所の運営、保育の場所があり保育者がいても保育環境が整わない全国の公立幼稚園、地域幼稚園が必要としていた保育教材の研修・提



供などです。同時に、農村での1日保育の難しさを経験して、より多くの子どもたちが幼児教育にアクセスできるようにと考えたのが、半日の「村の幼稚園」モデルでした。

国境を越えた難民に学んで

私たちが最初に出会ったのは、タイ国境の町に運ばれてきた空腹で傷つき、追われて病み、衰えて声もなく、明日への希望を持ってない大勢のカンボジア人でした。

「幼い難民を考える会」の活動は、内戦で破壊されつくしたカンボジアの社会で、将来を担う幼い子どもたちが、一人でも多く、より質の良い楽しく学べる場所を増やすことでした。

難民キャンプでの経験から会が学んだことは、難民を出さない社会づくりです。それぞれの地域で人々が、家族とともに過ごせる安定した暮らしです。それは、地域の人たちが、自分たちの暮らしの中に、子どもの未来を思い描ける社会です。地域の行政や村の人たちと協力してさまざまに繋がり合う機会を作り、子どもの親を始め、地域全体で子どもの成長を応援していけるようにすることです。地道な地域に根ざした活動からは、少しずつ幼児教育や幼児の成長への理解がひろがり、自立への歩みが大きく前進していきます。

謝辞

「幼い難民を考える会」の活動を、長年にわたりご支援をいただきカンボジアの子どもたちの成長を見守ってくださいました会員や支援者の皆さまに改めて厚くお礼を申し上げます。

44年前のカンボジアの難民の惨状に、力になりたいと始まった「幼い難民を考える会」の活動は、数え切れない数の、皆さまからの熱い思いとその強い力を軸に、難民キャンプでの活動が続けられました。私たちは破壊され混乱で傷んだ貧しいカンボジアの村や町で、地域の人たちと一緒に、子どもたちが安心して過ごせる環境作りを行なってまいりました。この地道な取り組みは、確実に地域に根付づいてきています。

遡って、カンボジアで新政権の成立直後、ポル・ポト派が闘いを続けていた1994年4月、名古屋の企業27社による募金寄付のおかげで、サムロンクロム村の小学校5教室の校舎が完成しました。そして大宮の小学生たちがこの小学校生徒と交流、北海道の小学校PTAと生徒との交換などが続きました。このように子どもたちが直接関わる支援は、会にとってこの上もない喜びでした。

そしてカンボジアの保育園というと切り離せないイメージは、子どもたちがいつも抱えている布人形と布ボールで、「みんなで布チョッキン」活動に参加いただいた企業、学生グループ、個人や子どもたち、大勢の関係者のご協力には計り知れないものがあります。カンボジアの貧しい家庭を支え、全国の幼稚園の子どもたちに遊びが広がっています。

また、カオイダンの「希望の家」で、帰国後に役立つ職業訓練として母親たちに大切にされた織物教室は、伝統技術の復活と女性の自立を掲げた1997年のプノンペン織物センター、その後のタケオ州の織物研修センターの開設につながりました。伝統的な絹絵紉の技術習得や藍染め技術の復興、その後の自立運営へと日本での反響にあわせて支援活動にも広がりができました。

助成団体、支援者グループ、個人の方々が建設・修復してくださった施設の建物、トイレ、校舎、園舎を始め、ゆで卵募金、絵本印刷、外遊具募金など、多くのご支援を頂戴しました。長年お心配りをいただき、「幼い難民を考える会」を今日まで支えてくださり心から深く感謝いたします。ありがとうございました。

幼い難民を考える会
代表理事 関口晴美



年表 — 「村の幼稚園」事業を中心に（2008年～2024年）

西暦	カンボジア等の情勢・政策	カンボアでの事業	日本での事業
2008	FTI3年計画（2008～2011）	全国公立幼稚園支援開始、全国の新地域幼稚園へ教材研修。提供開始	
	地域幼稚園450ヶ所新設		
2009	国家開発計画（2009～2013）	全国公立地域幼稚園支援開始	
2011		「村の幼稚園」カンダール州2園開設 （ブラサート、タブロム）	東日本大震災被災地で保育の場運営、遊具・教材支援、 就学の子ども支援
2012		藍染め技術復興研修開始。ピダン技術研修開始	
2013		カンボジア人職員による事業運営始まる 「村の幼稚園」タケオ州3園開設 （カンダール、ブムブノム、トロビエンクロライン） 教育省からGPE1,000ヶ所の地域幼稚園への教材提供。研修要請	カンボジア伝統絹絵紉「ピダン」展示会 阪神百貨店
	幼児教育5ヶ年計画 5歳児の75%が就学前教育のアクセス GPE3年計画（2014～2016） 地域幼稚園を1,000ヶ所開設	全国の新地域幼稚園へ教材研修。提供開始 「村の幼稚園」カンダール州4園開設 （チュティール、カオム・サムノルー、カオム・サムノクロム、リアンチュウ） 藍染め絹糸技術指導	
2015		「村の幼稚園」カンダール州1園開設 （スダオカンラエン・ブラム）	「村の幼稚園」支援メニュー作成企業向け
2016		最後の日本人職員が帰任 「村の幼稚園」カンダール州2クラス開設 （スバイドムナック5歳児クラス、4歳児クラス）	
2017		「村の幼稚園」カンダール1園、コンボンチュナン州2園開設 （クランリブ、ブレイチュロウ、ブレクリアン）	東日本大震災被災地支援終了
2018	地域幼稚園スタンダード認定制度始まる	「村の幼稚園」コンボンチュナン州5園開設 （4月：プロスナップ、チョー） （11月：クロブール、バックブノン、トンレクラウ）	
	新型コロナウイルス感染症予防のため全国で休園	モニタリング研修の強化、保育者能力強化研修 「村の幼稚園」コンボンチュナン州3園開設 （コンボンバスロクタボン、トクホート、トロビエンクロブー）	
2020	新型コロナウイルス感染症予防のため全国で休園	家庭での子どものケア、教材制作、保護者指導 「村の幼稚園」コンボンチュナン州2園開設 （ビームボベッチ、トロビエンブリン）	
2021		保護者の学習会実施 「村の幼稚園」コンボンチュナン州3園開設 （チュンビア、ブレククンロン、トロビエンボーン）	第14回かめのり大賞受賞
2022		幼稚園管理委員会の研修始まる 「村の幼稚園」コンボンチュナン州2園開設 （クロス・トゥメイ、オサンダン・トゥメイ）	第57回社会貢献者表彰を受賞
2023		学習コーナー教材制作ワークショップ開催 「村の幼稚園」コンボンチュナン州3園開設 （カンダール、コホロート、トゥルボンロー）	
2024		保育者向け手引書の作成配布	カンボジア伝統絹絵紉「ピダン」展示

CYK/CYRの教材は、これからもカンボジアの幼稚園で活用されます！

CYK/CYRの教材は素材、安全性などを考慮しながら作られています。温かみがあり、子どもが興味を持つ色あいで、楽しみながら学べるので、教育省の幼児教育局が地域幼稚園のカリキュラムに入れました。

解散した後、これらをカンボジアの幼稚園でどのように使い続けられるか考えていたところ、CYK/CYRの教材をウェブサイトでシェアしたいという連絡が入りました。ポーサット州で幼児教育活動を行っている団体TukTuk（トゥクトゥク）の小柳真裕さんからでした。TukTukの活動はCYK/CYRと似ていて、とてもいい機会だと思いました。どこの幼稚園もTukTukのウェブサイトにアップされている教材を無料で使用できます。CYRの片山さんと関口さんに相談し、理事会の方々にも賛同して頂きました。教育省幼児教育局との協力で作った絵本などはブラック・コソル局長から著作権の承諾を得ました。

CYK/CYRの作った絵本・教材・遊具がこのようなかたちで残ることで、これからもっとカンボジアの先生たちに広がっていきますので、安心しました。本当にありがとうございました。

プノンペン事務所長 チャン・スレイ



← TukTuk の教材サイトに掲載してある CYK/CYR のリストはこちらから。

下記リストの教材が、今後準備でき次第掲載されます。



絵本

TukTukの活動についてはこちらから →

CYK-1_កូនកណ្តុរនិងដីស_A-Mouse-And-A-White-Chalk

CYK-2_បូណាជាអ្នកល្អ_Bona-Is-A-Good-Child

CYK-3_ប្រាជ្ញាទីណូ_Clever-Tino

CYK-4_ពពាសល្អ_A-Good-Dog-Popeal

CYK-5_សម្លាញ់ប្អូន_Three-Good-Friends

CYK-6_កូនទន្សាយចេះស្តាប់បង្គាប់_Obedient-Rabbit

CYK-7_កូនទាចេះដឹងខ្លួនខ្សែ_The Duckling That Know How To

CYK-8_កូនពពែវៃយូរ_ A-Smart-Goat

CYK-9_ទីណូនិងស្បែកជើង_Tino-And-Shoes

CYK-10_រឿងទីណូ ស្រូច និងផ្លែត្រសក់_Tino-Srouch-And-Melons

CYK-11_ស្លាតនិងផ្លែឈាស់_

CYK-12_ទន្សាយចាញ់ប្រាជ្ញាខ្យង_A-Rabbit-And-A-Snail

CYK-14_ផ្លែឈើនិងបន្លែ_Fruits-And-Vegetables

CYK-15_កូនសៀវភៅអក្សរកខ_Khmer Consonants

CYK-16_សត្វមានជីវិត_Animals

CYK-17_សម្ភារៈប្រើប្រាស់_Tools

CYK-18_ពណ៌ក្រហម_Red

CYK-19_ពណ៌ខៀវ_Blue

CYK-20_ពណ៌ខ្មៅ_Black

CYK-21_ពណ៌បៃតង_Green

Take Care Of Himself

CYK-22_ពណ៌លឿង_Yellow

CYK-23_ពណ៌ស_White

CYK-24_កំណាព្យ_Poetry

CYK-25_អាតីអ៊ុន_My-Dog-Akey

CYK-26_ទីផ្ទៃស្រុកខ្មែរ_The-Land-Of-Khmer

CYK-27_ស្នងកំណាព្យកុមារ_Children's-Poetry-Collection

CYK-28_កូនឈូសសម្លាប់ខ្លា_A-Deer-Killed-A-Tiger

教材・遊具

CYK-29_ក្តារអក្សរកខ_Khmer-Consonants-Board

CYK-30_ក្តារផ្ទុះឡាន_Car-Puzzle

CYK-31_តារាងព្យញ្ជនៈភ្ជាប់រូបភាពនិងកាតព្យញ្ជនៈភ្ជាប់រូបភាព_Khmer-Consonants-Matching-Game

CYK-32_តុកក្តារក្រណាត់_Cloth-Doll

CYK-33_បាល់ក្រណាត់_Cloth-Ball

CYK-34_ល្បែងចងចាំឬល្បែងចាប់គូ_Memory-Game

地域幼稚園の保育者サポートブック

CYK-35_សៀវភៅជំនួយគ្រូមត្តេយ្យសិក្សាសហគមន៍សម្រាប់ខែទី១និងខែទី២_CPS teachers-support-book-for-M1&M2

CYK-36_សៀវភៅជំនួយគ្រូមត្តេយ្យសិក្សាសហគមន៍សម្រាប់ខែទី៣និងខែទី៤_CPS teachers-support-book-for-M3&M4

CYK-37_សៀវភៅជំនួយគ្រូមត្តេយ្យសិក្សាសហគមន៍សម្រាប់ខែទី៥និងខែទី៦_CPS teachers-support-book-for-M5&M6

CYK-38_សៀវភៅជំនួយគ្រូមត្តេយ្យសិក្សាសហគមន៍សម្រាប់ខែទី៧និងខែទី៨_CPS teachers-support-book-for-M7&M8

CYK-39_សៀវភៅជំនួយគ្រូមត្តេយ្យសិក្សាសហគមន៍សម្រាប់ខែទី៩និងខែទី១០_CPS teachers-support-book-for-M9&M10



子どもたちの明日 141号(最終号)

「村の幼稚園」事業まとめ 特別号

発行日：2024年12月16日

発行者： 関口 晴美

特定非営利活動法人幼い難民を考える会

2024年12月16日解散

プノンペン事務所(CYK) 2024年8月閉所

東京事務所(CYR) 2024年6月閉所

連絡先：info.cyrty@gmail.com

アーカイブHP: <https://www.cyr.or.jp>